

「熊野」と早歌「熊野参詣」

外村 南都子

先月上演された「俊寛」の中に、康頼と成経が鬼界が島に三熊野を勧請し、「都よりの道中の九十九所の王子」を順礼する場面があったが、平安時代から鎌倉・室町にかけて、熊野参詣が盛行し、「蟻の熊野詣で」ということばを生むほどであった。この京から熊野那智山に至る道筋を刻明に歌いあげているのが早歌「熊野参詣」である。

早歌は、能が大成される約一世紀ほど前の鎌倉中末期に、関東の武家社会を母胎として創り出され、観阿弥・世阿弥の頃にも、坂阿・口阿の父子の名人が出て中興期を迎え、室町末期頃まで歌われ続けた歌謡であるが、現在百七十三曲の歌詞が墨譜付きで残っている。これらの曲の題材は生活の全般にわたっているが、中に長篇の道行が三種含まれている。「海道」（京・鎌倉）「善光寺修行」（鎌倉・信濃善光寺）そうして、最も長いのが「熊野参詣」である。

この道行は、王子社に詣でつつ、ひたすら神仏への祈りをこめて、けわしい山坂を踏

み越えて行く参詣の旅をそのまま歌謡化したものである。はじめの部分を用いてみると、

八相成道の無為の都。真如の台は広けれど、和光同塵の月の影は。やどらぬ草葉やなかるらん。（中略）或は五更に夢をさまし。夕陽に眠りを除きて。煩惱の垢をや濯ぐらん。宵暁の去垢の水。所をいへば紀伊国や。

この牟婁の郡彦の山路の雲の濤。煙のなみを凌ぎて。思ひ立つより白妙の。衣の袖を連ねつつ。都を出る道すがら。あの北に顧れば又。大内山は霞みつつ。隔つる跡も遠ざかり。淀の河舟さしもげに。急くとすれど在明の。名残はしるて大江山に。傾く月や残るらん。行末をはるかに美豆の浪よする渚の院。の男山につづける。交野禁野の原。むかひの汀につのぐむ。葦の若葉を三島江や。難波もちかくなりぬらん。九品津小坂那戸の王子。すぎゆく方にやすらへば武庫の山風下し来て。浦吹き送る音までも。これや高津の宮柱。立ちて旧にし跡ならむ。……

というように、京を出発して大阪へ出、その後海岸沿いに西南に進み、山を越えて紀伊半島の西岸に出、田辺まで南下して、中辺路と呼ばれる山道を西へとって、熊野本宮から新宮へ向い、最後に那智の滝に至る熊野街道の道筋が詳しくたどられて行く。右の引用に傍線を付したのは道筋にあたる地名であり、二重線は王子社名である。この道行には、全体で順路にあたる地名が百十五もおりこまれている。前述の王子社は、改廃著しいものがあったようで、必ずしも九十九あったわけではないらしいが、鎌倉中末期頃の王子社の記録とつき合わせてみると、約半数にあたる六十余りが王子社名をあらわしているもようである。このようにして、この曲では、通過地点を大体二・三キロに一つの割合で、次々に掛詞を多く用いて列挙しながら、あたかも道を実際に行くかのように、途中の眺望なども所々におりこみつつ、進んで行く。例えば、先の引用につづいて、

西をはるかに望めば、夕日浪に浮ひて。淡路の瀬戸の夕なぎに。葦手にまがふ薄霞。絵島の磯の遠津浦。東に顧れば又。あの伽藍堂をならべて。宝塔雲にかかやき。一輪光を残しつつ。転法輪所をあらはして。法燈今に絶せず。並たてる安倍野の松に。鶴鳴きわたる磯伝ひ。

というように、「弱法師」の舞台でもある仏法最初の地、四天王寺をはじめ、難波あたりの春の夕景が歌われている。面白いことに、五曲連作のこの道行では、第一曲（大部分を右に引用）が春、第二曲が晩春から初夏、第三曲夏から秋、第四曲秋、第五曲冬と、全体で四季が一巡するように作られている。これは、いくら昔でも熊野まで一年かかったというわけではなくて、途中「万呂の王子みんろのみこの神館かみだち。見すぐしがたき稲葉ね。穂並もゆらと打ちなびく。田畑たはた（たづら）を過ぎて」と王子社の名にかけて、秋の豊作の様子が歌われていることに示されるように、四季の巡りの順調で、五穀豊穰であることへの祈願をこめたものと考えられる。この道行の最後は「百王の末も瑞籬みずがきの。久しき神の御代なれば。我が国やいつもさかへむ」という祝言をもって結ばれる。このように、早歌「熊野参詣」は、来世往生と現世の太平無為を祈願する鎌倉期の人々の心が生み出した結晶ともいうべき道行で、これを歌い聞くことにより、実際に熊野街道を行く思いをしたものであったと思われる。

× × ×

能の「熊野」は、冒頭の短かい道行ばかりでなく、曲の中央部に長い道行がある点、「杜若」や「百万」などと共に、道行の展開という点から、注目される曲である。この能は、

いうまでもなく、平家物語によっているが、原作では、重衡の東下りの所に、池田の宿の長者熊野の娘侍従の逸話として、「いかにせん」の和歌をよんで東国へのいとまをもらった話が簡単に出現しているだけで、曲のやまをなす都の春の道行の部分も、平家物語とは関係がない。能ではシテを熊野とし、曲名にも用いていること、又、清水で、あたりの情景を歌うクセの上ゲ端のすぐ後のめだつ部分に「大悲擁護の薄雲。熊野権現の移ります。御名も同じ今熊野」と、熊野権現を都に勧請した今熊野のことを出していることは、熊野を印象づけられる思いがする。この能の道行の先駆としては、梁塵秘抄の「いずれか清水へ参る道。京極くだりに五条まで。……」という歌謡があげられている。確かに、京の中を清水に至るといふ点では共通するものがあるが、地名をつらねたごく素朴なものである。前述のような熊野三山に到る詳密な道行歌謡が、この能の成立当時にも歌われていたことを考え合わせると、熊野という曲名と、いい途中の寺社に老母の病氣平癒を祈りつつ行く優れた行文の道行といい、神仏への讃嘆をこめた清水からの四囲の情景描写といい、早歌「熊野参詣」などの成熟をうけついで、その影響下に結実した作品という感が深いのである。

(とのむらなつこ 白百合女子大学助教授)